

人間の基本的欲求である豊かさの追求が、「守るべきもの」の誕生とそれを失うかもしれないという不安やリスクを生みます。言わば、豊かさとリスクは表裏一体です。現代のグローバル化と科学技術の広範囲かつ急速な進展は、例えば、地震と原子力発電所事故やサプライチェーンの寸断が結びつき、リスクを輻輳化、複雑化させています。さらに、豊かさへのあくなき追求は、自動運転やディープラーニング型人口知能やIOTなどの新しいリスク、すなわち、「エマージングリスク」を生み、急速な高齢化に伴う政府財政の悪化や地方自治体の疲弊は、潜在化していたリスクの顕在化と移転できない残余リスクを生んでいます。すなわち、科学技術の発展に伴うリスクの課題は、科学技術の副次的産物というより科学技術の本質問題に転換したと言えます。

更に、変化のスピードが多くの「経験や前例」の価値を低下させ、真偽の判断を利用者に委ねるインターネットやSNSは、リスクを科学者の研究対象から消費者・市民の生活の一部としました。言わば、リスクの市民化が進む中では、正当な専門家への尊敬も失せ、リスクコミュニケーションも成り立たない状況が出現しています。

滋賀大学経済学部では、世の中の動きに先んじ、2003年に大学院博士後期課程にリスク専攻を設置するなどリスク研究を牽引してきましたが、今般のリスクを取り巻く変化は、その射程をも超えていると言わざるを得ません。

大学において主力研究テーマの1つとしてきたリスク研究がこのような環境変化の中で国民の厚生とそりを合わせた着地点を見出すには、研究者が輻輳化するリスク環境に更に敏感になり、そのスピードや範囲に対応するため他分野と連携した研究にあたる必要があります。それは従来以上に、研究室の中だけにとどまるのではなく、その研究成果が社会実装されることを目的にすることが求められているように思います。

その一つの端的な方向は、例えば、「リスク移転」をファイナンスや保険により実現し、商品や社会制度の1つとして世に送り出すことです。また、会計分野と結びつき、リスク評価と会計を接合させた新しい会計制度を提案することなどが考えられます。また、住民がリスクに過敏になる中で、地方自治体が政策を運営する際にもリスクという概念を事前に持ち込み、それを設計、執行することが求められます。

一方で、大きくかつ急速なリスク環境の変化であるからこそ、物事の本質を見失わないように、改めて歴史や伝統事象から潜在化しているリスクやリスクに関する思想を現代によみがえらせることも逆に重要になっています。

国民が手にした豊かさを維持するには、リスクに対する個人や社会の脆弱性を一つ一つ補強、克服していくことが重要ですが、リスク研究を社会実装していく姿勢はその一助となると考えます。今回の特集では、「リスク学の社会実装にむけて」をテーマとし、10名の方の英知を結集しました。コンパクトではありますが、将来につながる新しいリスク研究の方向を少しでも示すことができ、これを導線にリスク学が発展していくことを期待しています。

以 上

2019年2月

滋賀大学経済学部教授
久保 英也